第１分科会　自閉スペクトラム症（ＡＳＤ）

自閉スペクトラム症（ＡＳＤ）の生徒への支援と指導の実践

宮崎県宮崎市立檍中学校　　指導教諭　藤田　司

Ⅰ　はじめに

本校は宮崎市の東部に位置し、地域自治区でみると市内でも２番目に人口が多い場所にある。校区には海岸があり、その背後には広大な松林が広がっている。海の玄関である宮崎港やレジャー施設も集まっており、自然と都市の融合が図られた宮崎市の中心部に位置する学校である。

本校では、平成３０年度から、「主体的に学習活動に取り組む児童生徒の育成」をテーマに、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善や、学習態度の確立、そして檍中スタンダードを共通実践項目として授業に取り組み、学力向上を目指してきた。また、令和２年度より県からエリア拠点校の指定を受けて、「みやざきの発達障がい教育推進事業」の一端を担っており、宮崎市内の学校支援や、教員の発達障がい教育に係る指導力向上、関係機関との実務的な協働等を通して、本県独自の「エリアサポート体制」の新たな構築の中にある。そういった視点からも特別支援学級のみならず、通常の学級に在籍している困り感のある生徒への支援のあり方についても実践研究を推し進めている。

令和２年度は全校生徒６３３名に対して、自閉スペクトラム症（ASD）の診断やそれに類する診断を受けている生徒の数は、１年生が９人、２年生が１１人、３年生が７人である。

Ⅱ　研究の目的

本研究の対象は、昨年度自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍の自閉スペクトラム症（ASD）の診断を受けている２年生徒Ａである。生徒Ａについての個別の教育支援計画と個別の指導計画にもとづいた、１年間の取組をまとめたものである。これらの計画をもとに、職員が組織的に関わることで、生徒Ａの力を伸ばし、校内の特別支援教育に対する理解と、支援体制の充実に繋がることをねらいとした。

Ⅲ　研究の進め方

１　年間計画

月	活動内容	月	活動内容
４月	アセスメント ・ICF 関連図　・WISC 検査　・観察 ・保護者面談	１０月	保護者面談（１学期の評価と２学期への計画の説明）　ケース会議
５月		１１月	自立活動における課題への取組
６月	個別の教育支援計画・指導計画作成 ケース会議　自立活動年間計画作成	１２月	保護者面談（指導計画の見直し・就学形態の変更希望についての最終確認）
７月	保護者面談（個別の教育支援計画・指導計画の見直し）	１月	自立活動における課題への取組
８月	職員研修（校内における中間報告）	２月	個別の教育支援計画・指導計画の年間評価
９月	自立活動における課題への取組 個別の教育支援計画・指導計画１学期評価	３月	保護者面談（引継事項の確認） 活動報告（ケース会議・職員会）

２　研究の内容

まず、アセスメント法として、ICF 関連図を使用し、WISC 検査の結果や行動観察をした様子を反映させて、生徒の実態把握に努める。そこで見つけた特性や課題を、個別の教育支援計画と指導計画に記し、関係者と情報を共有する。特に解決を目指したい課題を絞り、自立活動の年間計画に反映させ、目標と授業計画を立てて取り組む。取り組んだ手立ての有効性については経過観察を通して保護者や専門機関と学期ごとに検証を行い、手立ての見直しを行っていく。支援のあり方については合理的配慮（別紙資料１「個別の教育支援計画」（様式５）を参照）にもとづいて、実践したものを報告する。

以上の手立てを行った結果、生徒の変容を観察して、手立ての有効性を検証し、関係者と情報の共有を図る。

Ⅳ　研究の実際

１　アセスメントについて

（１）ICF 関連図について

ア　ICF 関連図活用のねらい

健康状態、個人因子、心身機能・身体構造、活動、参加、環境因子、主体・主義の観点から、対象者の特徴となる行動を箇条書きで文字に起こし、対象者の実態把握に繋げた。また、因果関係を矢印で視覚的に繋いでいくことで課題の明確化を図り、個別の教育支援計画に記載する実態の記録や課題に対する具体的な目標に反映させた。

イ　ICF 関連図作成の実際

（別紙資料２　「ICF 関連図を活用した状態把握」参照）

ウ　因果関係の仮定と課題の整理、目標設定

（ア）課題

実態把握を進めていくと、とにかく不安感が強く、安全欲求が満たされていないことで、通常の学校生活や学習活動が成立していない状況にあることがわかった。更に家庭では落ち着いていることから、その不安感の原因は学校の中にあると仮定し、その原因を考えて、取り除くことから始める必要があると思われた。

（イ）目標

① ２５分間の自学自習（１人で教室で過ごせる状態）に取り組むことができる。
② １週間単位で相談しながら決められた学習計画を受け入れることができる。
③ 登校したときは、約束した時間まで学校で過ごすことができる。
④ 決められた場所で過ごす方法を身に付けることができる。
⑤ 暴れたり、泣き出したりした理由を、自分の言葉で説明することができる。

（２）WISC-Ⅳの検査結果から

ア　全検査 IQ は知的発達水準「平均の上」

イ　言語理解９０、知覚推理８５、ワーキングメモリー９７、処理速度１０７

（３）行動観察について

学校生活だけでなく、家庭生活の様子も保護者に聞き取りを行いながらまとめていった。特にパニックを起こした時の前後の行動を記録しながら、パニックを起こす際の要因を探すように観察を行った。

2　個別の教育支援計画と個別の指導計画について

（1）表記について

観察を行いながら手立ての必要な行動を一文１個に端的にまとめることによって、課題となる行動を明確に見つけるようにする。

（2）目標設定の仕方について

本人と保護者の願いを聞き取り、進路先を視野に入れて目標を設定した。

ア　将来の生活についての願いを聴きながら、自立を目指した視点で考える。

イ　自立した生活に向け、中学校卒業時の目標を立てる。

ウ　卒業時の到達点に向かう為に、今年１年で辿り着きたい目標を立てる。

（3）具体的な取組について

不安感が強い生徒なので、刺激を減らす工夫を積極的に行い、ストレスを軽減する取組を行った。また、合理的配慮（別紙資料１）にも十分留意した。

ア　動線管理

他の生徒との接触を極力減らすために、登下校のルートや体育館への移動、トイレや手洗いに至る全ての動線をコントロールした。

イ　スケジュール

月曜日の１時間目と金曜日の１時間目は特に精神的な疲れが見られ、不安定なことが多かったので、必ず職員が見守るようにした。また、授業へ移動する時間帯を若干ずらすことで、他の生徒との接触を極力減らした。

ウ　刺激遮断

教室は刺激遮断の効果と学習支援を行うことを目的にホワイトボード型の間仕切りをして、刺激を軽減した。

3　自立活動の授業

生徒Ａの実態を踏まえた「自立活動　個別の指導計画」を作成し、より効果的な授業を行うことで障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服していくことを目指した。

（1）中心的な課題の整理

いくつかの課題の中から、安全欲求を満たされていないことが最大の問題だと捉えて計画を立てた。学校の中の安心できる空間作りを考えたときに、まずは本生徒が在籍する特別支援学級が安心できる場所になることと、学級担任やクラスメイトとの信頼関係が構築されることが重要だと考えた。

（2）短期目標の設定

ア　教室を自分の落ち着ける場所に変えていく。

イ　困ったときや心配なことがあったときに仲間や教師に援助を求めることができる。

（3）具体的な指導内容の設定

ア　集団でSSTゲームに参加して、楽しくコミュニケーションを図ることができる内容に取り組む。〈例：なんじゃもんじゃ（自作）、マシュマロタワー、協力ジェスチャーゲーム〉

イ　目的を果たすために、仲間と協力して、課題をクリアしていくゲームに挑戦する内容に取り組む。〈例：脱出ゲーム〉

ウ　コミュニケーションが生まれやすくするために、謎解きのヒントや道具の材料を教師に貰いに来る場面を意図的に授業に組み込む。

（４）指導目標を達成するために必要な項目の選定

	区分	ア	イ
指導目標を達成するために必要な項目	２　心理的な安定	［（１）］	［（１）］
	３　人間関係の形成	［（１）、（２）］	［（１）、（４）］
	４　環境の把握	［（２）］	
	６　コミュニケーション	［（２）］	［（１）］

（別紙資料３　「自立活動　個別の指導計画」を参照）

４　その他の支援

（１）教職員の共通理解を図る取組について

特別支援教育通信（通信名：「みんなの学校」）を発行して、個別の教育支援計画と個別の指導計画の情報を職員間で共有した。

（２）教職員の支援体制について

共通理解のもと、生徒の興奮時には、複数の職員で連携して対応しクールダウンを促した。状態が不安定な時には必ず原因があることを念頭に対応を図った。

（３）スクールサポーターの活用

生徒Ａが特別支援学級でスクールサポーター見守りの下に過ごす時間帯は、共に過ごす時間を計画的に減らすようにしていった。その時にタイマーを活用して、行動範囲と時間を制限しながら決められた場所で自学自習に取り組むことができるように促した。

Ⅴ　成果と課題

１　成果

○　交流学級での授業に全く参加できなかった生徒Ａが、１年の終わりには全ての授業に参加できるようになった。集会や給食にも参加できるようになった。

○　授業への参加の可否や、参加できない際の理由など、気持ちを自分の言葉で説明することができるようになった。

○　パニックで暴れることや、興奮して泣き叫ぶことがほとんどなくなった。安心して学校に登校できるようになり、学習意欲も高まってきた。

○　学校で１日過ごせる日もあり、理由のない欠席や早退もなくなった。

２　課題

●　集会や授業は後方から参加している。交流及び共同学習や他の生徒とのコミュニケーションは未だ不安を抱えている。同学年の生徒と会話を楽しんだり、一緒に遊んだりすることが今後の課題である。

●　２学期には交流学級の授業に参加する機会が増え、１人で自学自習をする機会が減った。したがって、自学自習に取り組む力は十分に定着したとは言い切れない。

●　学力の向上が、今後のステップアップや将来の進路選択の際に課題となっていく。

Ⅵ　まとめ

生徒Ａに対する実態把握を多面的に行うことによって、課題に対する原因を比較的正確に捉えることができた。結果として効果的な手立てが立てられたことによって、学校生活への適応が１年でスムーズに図ることができた。この生徒Ａの変化は、職員にとっても合理的配慮の必要性や、手立ての有効性を知る上で、非常に貴重な成功体験になった。この体験が、汎化され、他の生徒への支援の第一歩に繋がることを期待したい。